

コールリッジのワーズワス批評

黒 岩 忠 義

An Essay on Coleridge's Criticism of Wordsworth

Tadayoshi KUROIWA

Charles Lamb (1775-1834) が *Lyrical Ballads* 出版当時の批評界における Wordsworth の不人気と十分な理解を得ていなかった原因を彼の独創性と大胆な発想とに帰し、また余りにも深い思考性と感受性との故に、当時の読者たちには容易に受け入れ難いものであったと語るとき、一見 Lamb 程に彼にとって、心の暖い、かつ快活で眼識のある批評家はない。ところが彼よりも Wordsworth にとって偉大な批評家は S. T. Coleridge (1772-1832) であろう。Coleridge は当時の批評家達の中では学識に富みかつ分析的である。従って彼の Wordsworth 批評には心から傾聴すべきものがあるように思われる。まず彼による Wordsworth への多くの有益な言及は主として書簡集と *Table Talk* に見るが、彼に関する大部の批評は、何と云っても *Biographia Literaria* 「文学評伝」である。殊にその中の Wordsworth にあてられた数章は、批評家達のもっとも多く論じてきた Wordsworth の詩の局面、つまり詩の言語と韻律の問題が Coleridge 自身の思想体系及び詩の短所、長所の問題をも含めて、集められ分析されている。そこでは Coleridge は詩の主題にも時折、言及するがそれは彼の主要な関心とはあまり関係はない。Coleridge は Wordsworth が当時の批評家達に悪評をかっしたのは、他ならぬその言語理論のためであったと信じていた。したがって彼はその理論の曖昧な陳述と做すところを修正しかつその誤謬を説明しようとしてつとめている。しかしそのような彼によるあらゆる論証にも拘らず、彼の言語理論は果して Wordsworth のそれとどれ程の違いがあるのであろうか。そこで Wordsworth が *The Preface* 「序文」の中で展開した他のいくつかの基本的な点、つまり、詩人論、詩的創造の過程に関する陳述、また詩と科学との相違に関する哲学的論議等の問題を見無視することによってすすめられた Wordsworth 批評のもつ意味を、三つにわけ、まず第一部においては、できる限り BL からの忠実な引用に謙虚に耳を傾け、第二部にては、それに対する批判的検討を、そして第三部は、それに基づいて得られる Coleridge の Wordsworth 批評に関する総括的結論としたい。

I

まず Coleridge は *Biographia Literaria** 「文学評伝」の中で二人の共同出版である *Lyrical*

* S. T. Coleridge, *Biographia Literaria*, ed. J. Shawcross, 2 Vols., Oxford, The Clarendon Press, 1969. 以下 BL と略す。

*Ballads***「抒情民謡集」出版のいきさつを19年まえまで逆り、その起源を説明する。それによれば *LB* 出版の本来の計画では Coleridge は少くとも一部において超自然的出来事を、ただしそれらの出来事が喚起する感情の劇的真實の故に興味深い事件を書き、他方 Wordsworth は日常生活に手材料し、そこに新奇の魅力を魅えらせ、しかも全く粉飾のない言語と日常の会話のことばで書くようにつとめることであった。この計画は Coleridge も了解した通り Wordsworth によるそれらの詩篇は実験的なものとなる筈であった。しかし Wordsworth はその主旨とは趣を異にした「Wordsworth 独自の詩風、つまり、彼の天性の特徴とも称すべき熱情的にして高雅な、終始一貫して調子を下さないことばづかいをもって書いた二三の詩をもつけ加えた」と云う。(BL. II, p. 6 参照)。そして、その後長い間論争が起ったそもそもの原因を Coleridge は *LB* 第 II 版に付した長い「序文」にその決定的な誤謬があるとする。曰く、

「彼は〔ワーズワス〕は、この序文の中で、実際はむしろ反対の意味に取れる節もあるように思われるにもかかわらず、このような文体、すなわち日常用語をもってする文体をあらゆる種類の詩にまで、おしひろげて用いることと、彼が（不幸にして曖昧な表現を用いたように思うが）日常生活と称したものには含まれないような語句と文体は、すべて誤った弁護の余地のないものとして排斥することを必死となって主張しているものと考えられた。そして長い間続けられた論争が起ったそもそもの原因は、たとえその方向が必死となっていたにもせよ、この序文、すなわちその中に独創的天才の存在を否定し得ないこの詩集につけられたこの序文のためであったのである。」⁽¹⁾

(in which, notwithstanding some passages of apparently a contrary import, he was understood to contend for the extension of this style to poetry of all kinds, and to reject as vicious and indefensible all phrases and forms of style that were not included in what he (unfortunately, I think, adopting an equivocal expression) called the language of *real* life. From this preface, prefixed to poems in which it was impossible to deny the presence of original genius, however mistaken its direction might be deemed, arose the whole long-continued controversy.)

そして Coleridge は当時の Wordsworth の不人気に対する責任は、彼の詩にあるのではなく *LB* 第二版への「序文」の中で表明されたその詩的信条にあると指摘している。

それで Wordsworth 氏の作詩がそれ以来未曾有の反対攻撃に遭遇する運命に立ち至った真の原因は「抒情民謡集」の序文としてつけ加えられた論説に存するものと考えて差し仕えなからうと思う。この排撃論の正当なゆえんを明らかにするために、詩そのものの中でも、比較的凡俗な詩句が多く問題にされ、かつ引証された。詩そのものだけであれば、そう云う点も壁の瑕疵として、あるいは少くともそれほどほどの失敗ではないものとして当然忘れられ、あるいは、大目に見られたことであろうが、それが意図的であり、深慮熟考の結

** W. Wordsworth & Coleridge, *Lyrical Ballads*, 1798. 以下 *LB* と略す。

果好んで書いたものとして、公言された時、直接反抗を激発するに至ったのであった。」⁽²⁾

(In the critical remarks, therefore, prefixed and annexed to the “Lyrical Ballads,” I believe that we may safely rest, as the true origin of the unexampled opposition which Mr. Wordsworth’s writings have been since doomed to encounter. The humbler passages in the poems themselves were dwelt on and cited to justify the rejection of the theory. What in and for themselves would have been either forgotten or forgiven as imperfections, or at least comparative failures, provoked direct hostility when announced as intentional, as the result of choice after full deliberation.)

しかしながら、Coleridge はかくの如く「序文」の多くの部分において Wordsworth と意見を異にするけれども、Wordsworth は彼の詩語改革が本来は「感情の真实性」と「劇的妥当性」とによって正当化されても、当時の詩人達によって虚飾と技巧とに専用された文飾と比喩とに向けられた限りにおいて、彼の任務は有益であった点を当然のこととして、評価しないわけでもない。すなわち、

「同時にまた最近10年ないし12年間に世に公にされた優れた詩とあの序文出版以前に作られた詩の大部分とを比較して見るとき Wordsworth 氏の努力は決して無益ではなかったと、彼自らが信じるのもまことに当然であることの印象を受けることを付言せざるを得ない。」⁽³⁾

(I cannot likewise but add, that the comparison of such poems of merit, as have been given to the public within the last ten or twelve years, with the majority of those produced previously to the appearance of that preface, leave no doubt on my mind, that Mr. Wordsworth is fully justified in believing his efforts to have been by no means ineffectual.)

しかし、会話の言語は一般的に詩にとって相応しい言語でないと Coleridge は考える。ましてや Wordsworth が主張するが如き「身分の低い、田舎の生活」(“low and rustic life”)の言語においてをやである。何故ならば、「そのような状態では、人はより強力に、より単純に、しかもより純粹で直接的な熱情をもって、美しい恒久的な自然の姿と、より接触して語る」⁽⁴⁾とする Wordsworth の見解は承服し難いからであろう。さらに続けて曰く、

「さて、“Brothers”, “Michael”, “Ruth”, “The Mad Mother” 等々の如き、作者が多少劇的調子を添えている詩の中で最も興味あるものでは、そこに持ち出されている人物は、素朴と云う言葉そのものの普通の意味においては決して素朴な田園生活から取りあげられたものでないことは明瞭である。またこれらの詩に見られる情緒や言葉も、実際このような人物の心情や会話を如実に移しとったものと考えられることはできるにしても、『彼らの仕事や住居』と関連しているとは限らない他の原因や事情に帰することもできるのである。これらの詩に実際に取りあげられている程度のカンバーランドやウェストモーアランド地方の谷間に住む農牧を業とする人々の思想、感情、言葉あるいは風習は都

会と田園とを問わず、どんな生活環境においても同じような結果をもたらすような原因から説明することも可能である。」⁽⁵⁾からである。

(Now it is clear to me, writes Coleridge, that in the most interesting of the poems, in which the author is more or less dramatic, as “the Brothers,” “Michael,” “Ruth,” “the Mad Mother,” &c., the persons introduced are by no means taken from low or rustic life in the common acceptation of those words; and it is not less clear, that the sentiments and language, as far as they can be conceived to have been really transferred from the minds and conversation of such persons, are attributable to causes and circumstances not necessarily connected with “their occupations and abode.” The thoughts, feelings, language, and manners of the shepherd-farmers in the vales of Cumberland and Westmoreland, as far as they are actually adopted in those poems, may be accounted for from causes, which will and do produce the same results in every state of life, whether in town or country.)

かくの如く Coleridge は Wordsworth が主張するところの「身分の低い田舎の生活のもつ有効な感化力」は、それ自体極めて疑わしいものであることをつとめて示そうとしているように思われる。そして詩についての Coleridge の信条は Wordsworth が「序文」の中で公表せし見解とは全く相異なるものであることを自ら確認し、十分、確信をもって Aristoteles の詩の原理を次のように援用してみせる。すなわち、「詩は本質的には理念的であって一切の偶然を避け、またそういうものを拒否する。詩において一見身分や性格や、また職業を具象化した個人と見えるものも、そのある階級を代表するものでなければならない。詩中の人物は種的属性、すなわちその種一般に共通する特性を帯びるものでなければならない。ある特殊な個人が恐らく所有しているだろうと思われる性質ではなくして、その立場から当然所有しているだろうと、前もって一般に予想できるようなそういう性質を帯びていなければならない (BL, pp. 33-34)。このように Aristoteles にその論拠をおく Coleridge にとっては、LB に収められた詩篇のうち、このような要件に適うものは、わずか *The Brothers* と *Michael* の二つの作品に過ぎない。即ち、Coleridge によればこの二つの作品中に描かれた人物は詩の目的が要求する特性である、あらゆる真らしさと代表的性質とを具備している。他方、*The Idiot Boy*, *Harry Gill*, *The Thorn* の如き作品の中で描かれた人物たちには特異性、すなわち偶然的特性しか認められず、殊に *The Thorn* においては詩人自身の想像力から自然に出て、詩人自身の言葉として語られた部分の方が一般に喜ばれ、また将来においても、そうであろうと云う理由から、Coleridge にとっては田舎の言葉は「いく分純化されたものであれば、詩にとつて最良」とする Wordsworth の見解は妥当なものとしては認め難い。

「田舎の言葉は一切の野卑な田舎風が純化され、文法の法則に適合するように再構成されたものなら、田舎の人が伝える必要のある思想は比較的僅かで、また一層不明瞭であると云うこと以外には、どんなに学識があり、どんなに上品な、とにかく常識ある他の何人の言葉とも異なるものではない。」⁽⁶⁾

(a rustic's language, purified from all provincialism and grossness, and so far reconstructed as to be made consistent with the rules of grammar... will not differ from the language of any other man of common-sense, however learned or refined he may be, except as far as the notions, which the rustic has to convey, are fewer and more indiscriminate.)

また言語の最良の部分は Wordsworth が語るように野人が親しむ事物に由来するものではなく、心そのものの活動についての深い反省に由来するものであり、内部的活動、すなわち、想像の過程や結果に対して、一定の記号を有意的に適用することによって作られるものであり、この大部分は教養のない人々の意識の中には全く存在していないと反対する。(BL, II, pp. 29-40)。ましてや彼の主張では、Wordsworth は「人間の真の言語の選択」(“a selection of the *real* language of men”)と云うことばを使うべきでなかった。そこで Coleridge は、まず第一に「真」のと云うことばの用法が曖昧である点に異議を唱える。

「各人のことばは第一に、それぞれの個性をもっている。第二に各人が属する階級に共通な性質をも持っている。第三に普遍的に使用される語句もある。... それで、『真』を『日常の』あるいは『共通の言葉』にかえなければならない。この『真』のと云う意味の言葉は、いかなる階級の言葉づかいにもあり得ないと同様に素朴な田園生活を営む人々の言葉づかいにも存在しないことはすでに述べたところである。それぞれの言葉に特有な部分を取り除けば、その結果はもちろん共通なものになるに違いないのである。... 問題は興奮状態にあると云うことばをつけ加えたところで、一向によくはならない。何故ならば、悦びや悲しみ、あるいは怒りなどによって非常に興奮した人の言葉の性質は、その人の心に前もって蓄えられていた一般的真理や観念や形象の、そしてそれを表現するための、言葉の数やその質の如何によらなければならないからである。何故なら情熱の特質は創造することではなくして、烈しい活動を引き起すことである。」⁽⁷⁾

(Every man's language has, first, its *individualities*; secondly, the common properties of the *class* to which he belongs; and thirdly, words and phrases of *universal* use. ... For “real” therefore, we must substitute *ordinary*, or *lingua communis*. And this, we have proved, is not more to be found in the phraseology of low and rustic life than in that of any other class. Omit the peculiarities of each, and the result of course must be common to all. ... Neither is the case rendered at all more tenable by the addition of the words, *in a state of excitement*. For the nature of a man's words, where he is strongly affected by joy, grief, or anger, must necessarily depend on the number and quality of the general truths, conceptions and images, and of the words expressing them, with which his mind had been previously stored. For the property of passion is not to *create*; but to set in increased activity.)

次に Coleridge の Wordsworth 批評は韻文の言語と散文の言語の違いへと及ぶ。むしろ、この問題は彼にとって主要な関心事であるらしく多くのページが、この問題にさかれている。そこで彼は

「散文と韻文の言語との間には本質的の違いはないとし、またありえない」とする Wordsworth の主張を検討する。Coleridge によれば、本質的と云う言葉はその第2義的用法では「同一の実体または主体の二つの変態の区別点、すなわち区別の根拠」を意味する。したがって、Wordsworth は詩を構成する語句の構成形式あるいは構造は本質的に散文のそれとは異ると云うことを否定したのであるとし、以下のような論評を試みている。

「真の問題は真面目な散文には相応しく自然でありながら、韻文の詩には不釣合で異様な感じがすると云ったような表現の様式や構文、またそう云う文の配列がないかどうかと云うことである。またこれを反対にして用いる言葉の種類や回数や、場合等の点で同じように重要な主題を取り扱いながら、立派な散文としては欠点と見られ、似つかわしくない感じのすると云ったような言葉と文章の配列法や云いまわし（と呼ばれるもの）の用い方とか選び方が真面目な詩の言葉の中にはないかどうかと云うことである。私はそのいずれかの場合にも、互いに一方が他方に代る時、たがいに不適當になることがしばしばあるのであろうし、またなければならぬことを主張するのである。」⁽⁸⁾ と。

(The true question must be, whether there are not modes of expression, a *construction*, and an *order* of sentences, which are in their fit and natural place in a serious prose composition, but would be disproportionate and heterogeneous in metrical poetry; and, vice versa, whether in the language of a serious poem there may not be an arrangement both of words and sentences, and a use and selection of (what are called) *figures of speech*, ... which on a subject of equal weight would be vicious and alien in correct and manly prose. I contend that in both cases this unfitness of each for the place of the other frequently will and ought to exist.)

そこで、このような彼の主張の根拠は一体どこからくるのであるか。それはまぎれもなくその根拠を彼は韻律の起源においている。彼の主張によると、高揚かつ興奮の状態では「熱情の働きを抑止するために」韻律を手段として均衡が求められる。そこで韻律は二つの条件を必要とする。まず第一は韻律の要素はその存在を高められた興奮からくる自然の言語を伴っている筈である。次に人為的、有意的な経画の努力もまた韻律語の中に認められねばならない。このように熱情と意志、「自発的衝動」と「自意識的目的」とは互いに浸透し合う統合関係がなければならない。またこの融合調和は「意志によって和げられ、支配された熱情が人に伝えることができるある快感をうるために、自然の熱情を誘発し、しかもそれを維持して行けない場合には、必要以上の、とても堪えられないような種々の語形や言いまわし（発生的には情熱の所産であるが、今日、意志力の養子となったもの）の乱発となって顕れる、と。(BL, II, p. 50 参照)

次は Coleridge は韻律へ効果の点から論をすすめる。それによると、韻律は、それ自身として本来的に作用する時には「一般の感情及び注意の活発さと感受性とを増大する傾向がある。... したがって、このようにして高められた注意と感情とに対し、それ相応の糧と、それに適切なものが与えられない場合は、必ず一種の失望を感じるに相違ない。」(BL, II, 51)。更に彼は云う。韻律は

